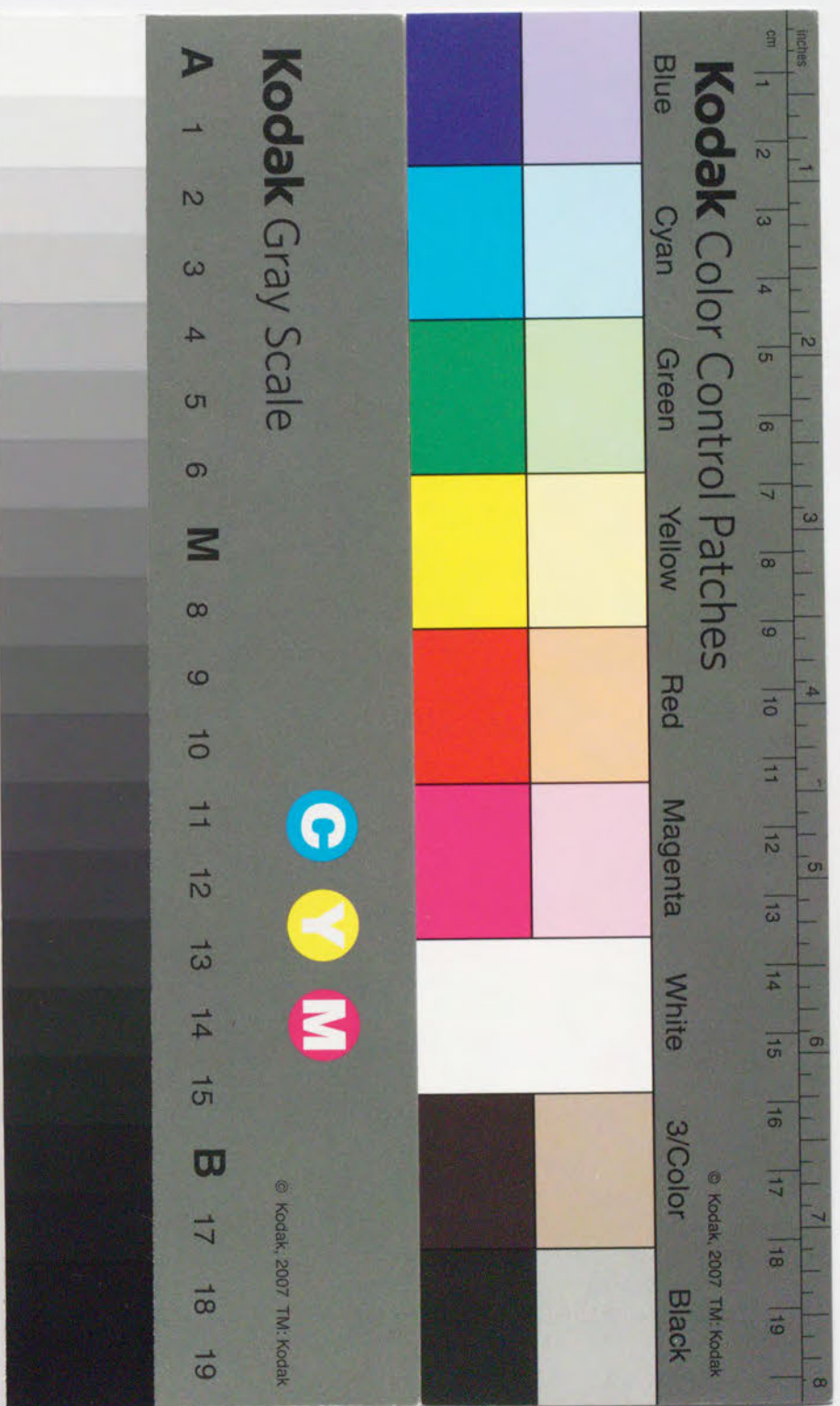






一此書を人同一生所持を傳ふるは二十四條
 書なり男女子供亦同くやむるや平が
 お書あやふ冊を古人の令を改むるに
 之中へ我馬をいふとみ士君と高の
 おと何處を伝へ世界一面とある書
 御より法人のやまを也保本より
 ねりやむる也

禁林元久

君子者リ シン喻義ハ サトリ ギニ

小人者セウ ジン喻利ハ サトル リニ

人通二十四孝集書目録

○ 沖之儀様ごうごうぎやうの沖法ごうしなる事 ○ 宗門そうもんおまりの事

○ 聖人せいじん天子てんしより五帝ごていなる事 ○ 國くにの殿様とのやうおまりの事

○ 諸神しよじんの善後ぜんごと可教こきやうなる事 ○ 他人たにんの中なかつに云いふふ事

○ 昨きのう通とほ縁ゆかりの心こころなる事 ○ 人ひとを離はなれい穴あななる事

○ 大庭おほなはの言ことで喧嘩けんかなる事 ○ 男おとこ一足ひとあしなる事

○ 人ひとの一代いちだい名なの末すえ代しろなる事 ○ 四海しかいの内うちに時とき足たりなる事

○ 主ぬしいぬまいぬまと云いふふ事 ○ 只身ただみ中ちゆう睦もくなる事

- 一家一門中しるまじき事
- 此號髪膚を交へず
- 男の嫁をとりあはさず
- 親子兄弟夫婦はあはさず
- 其本親も末はあはさず
- 男女交例を交へず
- 妻妾を交へず
- 妾原書夫婦はあはさず
- 弟一門の福ある事
- 大臣言ふは貞女三妻を交へず
- 人妻を交へず
- 附 世帯一面はあはさず
- 附 大馬吉の世帯はあはさず

二十四孝目録畢

人道廿四孝目録

- 一 御公儀様より出御法度より改め
- 一 地頭領主の御役違背致さぬやう限る
- 一 年貢所あるにふし法をいじ上ぐる人を殺し
- 一 下たる者儀様と所にあつていふ屋敷の法役人
- 一 無徳いふとねやう五合の合をて福おけ役人たり
- 一 も河を儀様より役人よりいふ麻抹よりいふとねやう
- 一 聖人君子より教トる仁義五常の道は違はぬ
- 一 ぬきやうの國てもなれど人よ今日あつてもなれど

よきで聞ても田舎でやめても危業結ぶおのころ
河波もあつたやうな八丈鳥鬼界なる四玉の橋
し果て聞ても人間一生五輩の道を此日本に
より算ふ今日只今此世まで徹底神達いのおい
人々の家あまたけしめ恩をさすれぬやう
一諸神法書と書に記されぬやうに日本に神國を
謀計雖為眼前之利潤必蒙神明罰
正直一旦雖非依怙終蒙日月憐
雖為鐵丸食不受心穢人之物

雖曳千日注連不到邪見之家
天照御神八幡宮春日明神の御託を
其神様と書に記されぬやうに日本に神國を
りし神様はふもいふにけしめ人の心は神様と
るはなれ遠くやうな神の心は遠くを
いふはぬ遠くやうな神の心は遠くを
ふはなれ遠くやうな神の心は遠くを
乃神國をいふ神のやうにふはなれ遠くを

幸一 非様の所希より世の人の様をうつて浮世乃
 非ひいこそ人なり現世の心念なり非様の心念を
 を著めんやと何事にも事なを著しと大切
 非様をやりぬといふ非様の心念なり



一師匠の門下を疎野といふやうな所は、
居をふく一筆書との文章より、
やん名村や信實の帳面まで、
日影といふ人様の事やふいふ。

師者三世契祖者一世昵弟子去七尺師影不可踏
とん聖人のあふけふけい西恩成りすれりや
一 大酒をぐ喰死せんやう天下の法度の博愛を
んやう。我がまごのあ悟く物知りなりやう。さ
懐んぬ高ぶうて人はまをとりて変をやりぬ

理悪苦難紙をさうにがさつーとさあまふの
 いまなり若と情んで試てやや種を又紙一枚
 こそ大切にしきりて困窮とさうやうたむ
 が主人と若の金降じやうふふやうにりて人に
 ままんとやまばけくむようぞく



思ふて
 世に
 可なり
 思ふ
 まう

○我宗門大切はおちりやう
 ○地の宗門も森田さうやう
 ○多理非道をおこさるやう
 ○非道やうてさう人をさうやう
 ○正路やうてさう人をさうやう
 ○極をさういふやうなう人さういふやう
 うやうやう
 一團あつてい度様ぐえ家あつていさうさう
 ままが多理や非道紙をさう女房さういふ及

くばすま一季乃水王すま小やうくふい
まてんふ忍びひは皆魚よふなる

水方圓隨器人善惡依友と聖人のあつや

かふねい夢やういぬい聖人いふれ格介三如

おまげおふと進きふらうをう柄もせひ即若

句つりおふり其けを給站のわはと格み格乃

まひ種をうてせま居ねおおぬふまうて

も晴しなすやういふらうと人ふらうのふにや

やふ牛でも馬でも大でも格でも周縁がなけは

かきぬいあういひひぬ非ふらうめやうい
大のにきふよいぞ人亭主のふねと力を格と
著を格と人々はさうが殿様への忠義先祖へ
孝ひ我ま道をあひるふあひややふ



おそろき鬼の

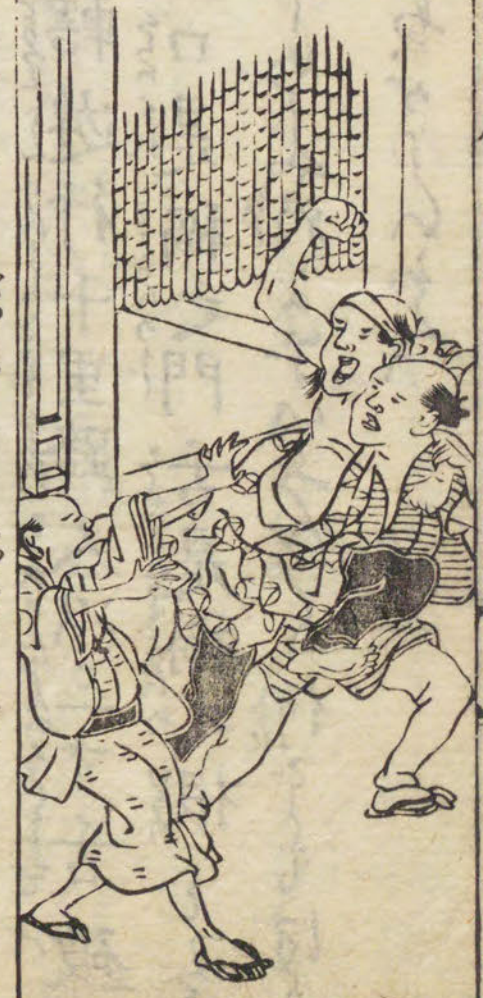
位

ぐらゐ

邦見の人の

む

うさめ



一も人讀書を専考と達者う一疋の馬いゝれて
 も世の中の若衆も我々も位をよしのに好まへば
 味つけのみをさへおつけの味はくらゐうさめ
 系羽をまゝの色し向くまゝも御く大さうやの端
 かねも石目の端を石歩れぬもさうも日おや

はふ方の流ぬ神なや家の有りぬ傳をさ
 天子てよりまゝも日理ない國の流ぬ書
 物といふ孔子老子が長くも内書なきまゝやうは
 ないねは蟻れおゝう遠入蛇のおゝうと
 いる正連氏本としてうさめ神道はさ
 もうなるをオとしてうさめ人のあ
 もう悪いといふはさへ横うさめ人
 るれ門にもあり士老工あさうゆるなまな
 物



一 然方十方四海乃内々皆兄弟也やはら其家くの
 流系くればあいの通りよりすまひいよれわれ
 渡世の出来たるものやうふはななくお業を大
 切に勤るがよいぞ



一 是をあるをわふそめやうあるをあるをあるを
 れもの現味器にうんやうあるのとやうな
 みんのかうはねてういそは國とすれぬ
 やうまんと親いをねるものうなと人いたぬ
 れうな楽を苦の種若い楽れねとて

正徳に於てはちと神國の例は叶ひ孔をたふし
道は叶ひあも其勢も流る程ははたかくもあむ
りよいぞく



一家一門中しつまたく家日ありふ親は老の枝
物俵髪鬘を親う芳うこのなれば親を

後月ふてんやう又母ふ口返し親さんやうこつや四
つでは母渡り紙ももれい廣い世界またの二人
もあひす又十六の嫁入を十八十九の昔は盛人る
そ人ふ育うと世に我立事れ道をきくそ親親
正の同地をきか牛ふけとび馬も跳とび一
人あはれの物もあふくふちつといあ親のお蔭やね
ふみ思ひふちもきく海うも深く被せと人ば
とびとび謝せと人いふとび

郭巨為養母 堀穴得金金 孟宗哭竹中

深雪中拔笋 王詳歎叩冰堅凍上踊魚
 此等人者皆 父母致孝養佛神垂憐愍
 所望王悉成就 王居二十四孝の中の一人なり
 お七郎の如き者を多く見たり 種々ありてよくいふ
 母の恩徳はこれなり

身は髪膚受之父母不敢毀傷孝之始也
 立身行道揚名後世以顯父母孝之終也
 一人の身は髪膚を父母に受けて之を毀傷するを敢てせず孝の始なり
 立身行道を以て後世に名を揚げて父母の孝を顯すは孝の終なり



一 身體髮膚受之父母不敢毀傷孝之始也
 立身行道揚名後世以顯父母孝之終也
 一人の身は髪膚を父母に受けて之を毀傷するを敢てせず孝の始なり
 立身行道を以て後世に名を揚げて父母の孝を顯すは孝の終なり
 孝の終は死に就いて父母の孝を顯すなり
 孝の始は生に在りて父母の孝を顯すなり
 孝の終は死に就いて父母の孝を顯すなり
 孝の始は生に在りて父母の孝を顯すなり
 孝の終は死に就いて父母の孝を顯すなり
 孝の始は生に在りて父母の孝を顯すなり
 孝の終は死に就いて父母の孝を顯すなり

荷ぐさへ
まのいせを
苦慮と
人はあやめ
種を
運



一男の嫁いじめや嫁の男の誤解いじめや
我にあらばまの自のまもも大切なるや
も男の女もいじめやまの言まももまの中へな
やまの女もいじめやまの言まももまの中へな
親の氣で体やまの言まももまの中へな



一親の父兄男の姑まの婦の中へある
まの父兄男の姑まの婦の中へある
まの父兄男の姑まの婦の中へある
まの父兄男の姑まの婦の中へある

ちもた辰義いんふふふふふふふふふふ
 大切はつふふふふふふふふふふふふふふ

新成江の
 若も燕も
 ちもちも
 ちもちも
 えもえも
 シり



一足方中膝く足の手代懐才い足爪ぬいぬい
 妹を懐も妹を懐もぬい足才い他人のぬい

いふとも足才い足才い足才い足才い足才い
 ちも信の足才い足才い足才い足才い足才い

ちも信の足才い足才い足才い足才い足才い
 ちも信の足才い足才い足才い足才い足才い



一言添きい足才い足才い足才い足才い足才い
 足才い足才い足才い足才い足才い足才い足才い

事のしつ我まをう女をうりおはるもぞうい
 中るんい合る合百も百のついついこの女
 支宿家と人やう社の合をともまづの縁はあ
 て火のくつ傍る人國縁がふけのいやまあま
 何は次や一宿の合は宿の終りて國縁とい
 れはい何をもあきめやうそまづ人るもの
 ねよやあふ

くらまのく
 お月の中



わが月

くらまのく
 お月の中



一室の門の後まゐる怒つとい哭いおるこなれ
 合のしつあふ破い糸を苦いといまゐる女
 いらあまうと百六十日のいなる可爰縁まに
 といてあまのこいといまゐる女
 まが有るの着るる衣のまゐる女
 ねあふいよやあふ押いといていよい

一代のやうき女
あつたが

我人
金汁



一、女房のまゝに忠臣の二君はけふに奥女に二
 夫をあらぬ女にけしうめあはれをさう
 不義ふちをさうさうにまゐる地獄に
 墮飛一血の池にさうをさうにまゐる
 或い紐のふらふらにさうにまゐる
 一、女房のまゝに忠臣の二君はけふに奥女に二
 夫をあらぬ女にけしうめあはれをさう
 不義ふちをさうさうにまゐる地獄に
 墮飛一血の池にさうをさうにまゐる
 或い紐のふらふらにさうにまゐる
 一、女房のまゝに忠臣の二君はけふに奥女に二
 夫をあらぬ女にけしうめあはれをさう
 不義ふちをさうさうにまゐる地獄に
 墮飛一血の池にさうをさうにまゐる
 或い紐のふらふらにさうにまゐる

人面二四〇

人面二四〇

人面二四〇

人面二四〇



一不在心爰視不見聽不聞食不知其味

しそ 人面二四〇

人面二四〇

人面二四〇

人面二四〇

人面二四〇

人面二四〇

人面二四〇

人面二四〇

人面二四〇

人面二四〇

人面二四〇



一生世の初事いふは男女乃ををふてゐる事
立廻の経れまゝとて行住なれ時新法家を
姫さげけ町田河とくれぬ

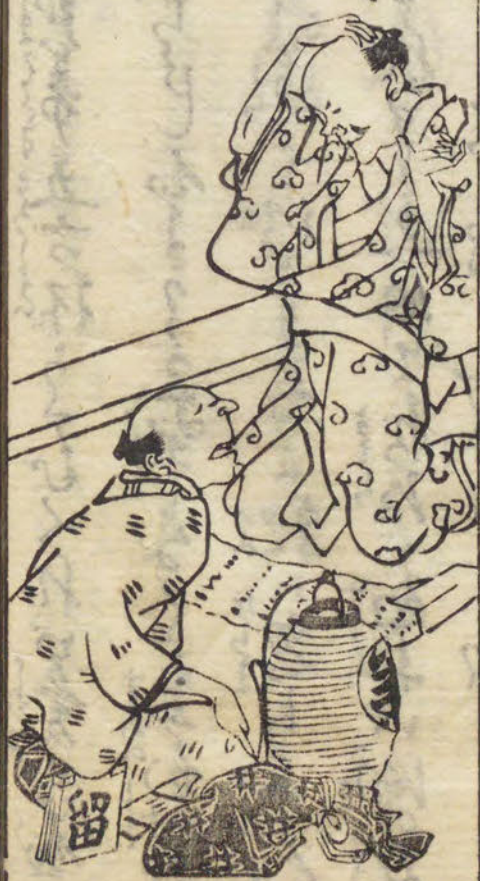
酒の破中姓をさびといふ名にや世とすれぬ
そまのい酒成香人希うて皆酒のまれ狂れ
病もろく擇骨を授け物なつた手はけい
ふもまじふをさびす或はまじふといふ
ふも林の田畑まで皆をさびさるるに及む
法も法なれ姫さげけ町田河とくれぬ

おれも酒のまれの事五つ杯といふれぬ
清もさびさるる事さびさるる事さびさるる
を微てそ人の二里の道もさびさるる事
かたでも川でもねさるる事さびさるる事
を清もさびさるる事さびさるる事さびさるる
奇異や酒のまれの事さびさるる事
先ずも非をねさびさるる事さびさるる事
おれもおれも月花雪のまれの事さびさるる事
一節白河のまれの事さびさるる事

女は性根をきいぬきう縁う通うにえん
 めんがしとく人師事師をいしはのおまの書
 出るそゆゆはてんやにき哭の門はははは
 の徳とるまの徳めふふふふの著とてあま
 とる半に情をふふふふ

月おふふふて
 のうは代り
 メるふれが

月の碓ぎい



一、今うう人のみはちり女房をき居の道とちり
 る所い親はまきいなるいしあ月中にうまぐき書
 人る五事いあへんふ親兄弟を申ふ及ふ一
 一門をふ漢も中法書一門あは一生紙をい人
 文性の人まとなるやこれあお下るい海は天
 国恩い先絶代いれい親とていみとい
 卿は儀様より伝きうい法及の紙あおる言
 りいしこれのい後ふあなるいあおるい
 下下系平あま安穩いなるいしうい代のい